ストラディヴァリウス1725年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」

このヴァイオリンはドイツの著名なヴァイオリン奏者アウグスト・ウィルヘルミ（1845～1908）によって演奏されていたことからこの名前が付けられた。法学博士でありアマチュアのヴァイオリン奏者であったウィルヘルミの父親が1866年に息子のために購入した。ウィルヘルミは所有していた多くの名器の中でもこのストラディヴァリウスを特に気に入って演奏していたが、公での演奏活動を休止して暫くたった1896年、「演奏者としてベストなうちに引退したい」と言って、50代の若さでこの楽器を手放した。日本音楽財団はアントニオ・ストラディヴァリ（1644～1737）の他、グァルネリ・デル・ジェス（1698～1744）によって製作された弦楽器の名器を保有している。それらは国籍を問わず無償で演奏家に貸し出され、演奏活動に役立てられている。

大谷 康子
Yasuko Otani

©Masashige Ogata

2020年にデビュー45周年を迎え、人気・実力ともに日本を代表するヴァイオリニスト。華のあるステージ、深く温かい演奏で聴衆に感動と喜びを届けており「歌うヴァイオリン」と評される。東京藝術大学、同大学院博士課程修了。在学中よりソロ活動を始め、ウィーン、ローマ、ケルン、ベルリンなどでのリサイタル、トロント音楽祭、ザルツブルグ市などに招待され好評を得る。スロヴァキアフィル、シュトゥットガルト室内楽団など国内外の著名なオーケストラとも多数共演。また、1公演で4曲のヴァイオリンコンチェルトを1日2公演行うという前代未聞の快挙を達成し話題となった。2017年はウィーンのムジークフェラインでリサイタルを開催。夏にはロシアの名門モスクワ・フィルの日本ツアーにソリストとして出演し絶賛を博した。キエフ国立フィルとは2017年以降毎年招聘され、2019年11月ウクライナにて3年連続の共演を果たした。また、2019年5月に実力派ピアニスト、イタマール・ゴランと全国ツアー（12都市）を開催。最新CDはイタマール・ゴランとのフランスのエスプリ薫る珠玉の名曲集。文化庁「芸術祭大賞」受賞。東京音楽大学教授。東京藝術大学講師。（公財）練馬区文化振興協会理事長。川崎市市民文化大使。高知県観光特使。（公財）日本交響楽振興財団理事。使用楽器はストラディヴァリウス「ウィルヘルミ」（1725年製／日本音楽財団貸与）。

©Kazuto Shimizu

林 絵里
Eri Hayashi

東京に生まれ、4才よりピアノを始める。1977年第31回全日本学生音楽コンクール奨励賞受賞。桐朋女子高校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。ピアノを樋口恵子、弘中孝、中島和彦の各氏に師事。卒業後、同大学に於いて2年間、弦楽科伴奏研究員を務める。1986年第8回チャイコフスキー国際音楽コンクールのチェロ部門で最優秀伴奏者賞を受賞。1986年より日本国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門の公式ピアニストを務めた。1991年、ミュンヘンにてワルター・ノータス氏に師事。これまで、スティーヴン・イッサーリス、エドアルド・メルクス、ドン・スク・カン、バルトゥミオ・ニジョー、ヴィヴィアン・ハーグナー、エリック・シューマン、徳永二男、諏訪内晶子をはじめ、数多くの演奏家と共演また、NHK交響楽団メンバーとの室内楽演奏や、NHK-FM、CDの録音なども行っている。現在、国内外で共演ピアニストとして活躍中。

北九州市ジュニアオーケストラ

北九州市ジュニアオーケストラは、1981年に発足。これまでに海外の姉妹・友好都市への演奏旅行や、新潟や浜松市で行われたジュニアオーケストラ・フェスティバルへの参加等を積極的に行っています。現在小学4年生から高校3年生までの約70人で構成されており、夏に行われる定期演奏会、団員の自主企画によるチャリティースプリングコンサートを活動の中心として日々の練習に励んでいます。

チケット取扱・お問い合せ（9時～22時）

北九州市立黒崎文化ホール **黒崎ひびしんホール**

〒806-0034 北九州市八幡西区岸の浦 2-1-1
Tel.(093)621-4566 Fax.(093)621-4522
http://www.kurosaki-bunka.jp/

ACCESS	■電車 JR黒崎駅より徒歩10分 ■筑豊電鉄 黒崎駅より徒歩10分 ■バス 西鉄バス・市営バス 熊手四ツ角バス停降りてすぐ ■車 北九州都市高速黒崎インターから車で5分
駐車場	■最初の1時間無料その後30分ごとに100円 ○黒崎ひびしんホール（8:00～23:00）120台 ○八幡西図書館（8:00～23:00）120台

＼最新情報をチェック!／
黒崎ひびしんホール facebook ページ開設!
北九州市立 黒崎文化ホール 検索

子どもの未来をひらく
ヴァイオリンコンサート

2021年3月21日（日）

開場／13:30 開演／14:00 終演予定／15:40

【出演】

大谷 康子（ヴァイオリン）
林 絵里（ピアノ）

北九州市ジュニアオーケストラ（指揮：小森 康弘）

主催：公益財団法人日本音楽財団・北九州市・株式会社黒崎コミュニティサービス
助成：公益財団法人日本財団　後援：北九州市教育委員会

日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION　Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Program
プログラム

1部　大谷 康子 & 林 絵里

- ◆ エルガー　愛の挨拶
- ◆ ヴィヴァルディ　「四季」より《春》第１楽章
- ◆ マスネ　タイスのめい想曲
- ◆ フランク　「ヴァイオリン・ソナタ」より第４楽章
- ◆ チャイコフスキー　「ヴァイオリン協奏曲」より

2部　大谷 康子 & 北九州市ジュニアオーケストラ

〔北九州市ジュニアオーケストラ〕

- ◆ ヨハン・シュトラウスⅡ世　芸術家のカドリーユ
- ◆ ジョン・ラター　「弦楽のための組曲」より第１楽章・第４楽章

〔大谷 康子 & 北九州市ジュニアオーケストラ〕

- ◆ メンデルスゾーン　「ヴァイオリン協奏曲」より第1楽章

出演者・曲目は変更になる場合がございます。ご了承ください。

©Masashige Ogata

Music Commentary
曲目解説　執筆者：飯田有抄（いいだありさ）

エルガー／ 愛の挨拶

イギリスの作曲家エドワード・エルガー（1857～1934）の作った「愛の挨拶」は、とても優しく美しいメロディーの音楽です。この曲は、エルガーのピアノの生徒だったキャロライン・アリスへのプレゼントとして作られました。エルガーは彼女と結婚の約束をしたので、その記念になる曲を作ったのです。アリスはエルガーよりも８歳年上でした。その頃のエルガーは、まだ作曲家として有名になっていませんでしたが、アリスはエルガーを一生懸命に支え、はげましつづけました。アリスの両親は売れない作曲家との結婚に猛反対しましたが、それでも二人は結婚することにしました。エルガーにとって、アリスはとても大切な人でした。アリスをどれだけ愛していたのかは、この作品の美しさからよく伝わってきます。

ヴィヴァルディ／「四季」より《春》第１楽章

続いては、イタリアの作曲家アントニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）の作品です。ヴィヴァルディのお父さんは教会のヴァイオリニストでした。彼は小さな頃からお父さんにヴァイオリンの演奏法を教えてもらい、早くから才能を発揮したそうです。

「四季」は《春》・《夏》・《秋》・《冬》という４つの曲でできています。それぞれの季節には、ソネットという詩による美しい言葉がそえられていて、それぞれの曲が描き出す風景を伝えています。ヴィヴァルディの時代には、音楽にタイトルを付けたり、内容を言葉で説明するのはとても珍しいことでした。第１番《春》第１楽章のソネットは次のようなものです。

「春が来た　楽しげに　幸せそうに小鳥が歌う／小川が西風にささやく／やがて空は黒い雲に包まれ　雷が鳴り、稲妻が光る／　嵐が去ると　小鳥が再び喜びの歌を歌う」

もともとは独奏ヴァイオリンとオーケストラによって演奏される曲ですが、きょうはヴァイオリンとピアノによる演奏で聴きましょう。

マスネ／ タイスのめい想曲

ヴァイオリンが甘く優しいメロディーを奏でる「タイスのめい想曲」は、フランスの作曲家ジュール・マスネ（1842～1912）が作った「タイス」というオペラ（歌を中心にした劇）の中の一曲です。オペラの一曲と言っても、歌手は歌わずヴァイオリンとオーケストラがゆったりと演奏します。きょうはピアノがオーケストラに代わって演奏します。

いつでも自由に楽しいことばかりしてきた主人公の女性タイスが、修道士アタナエルと出会い、彼の教えに導かれて、神さまを愛し、信じる心を持つようになっていくという場面で演奏されます。心が洗われるような、しっとりとしたメロディーが人気となり、この曲だけがオペラから取り出され、コンサートのプログラムやアンコールで演奏されることが多くなりました。

フランク／ 「ヴァイオリン・ソナタ」より第４楽章

作曲者のセザール・フランク（1822～1890）は、ベルギー出身のパリで活躍した作曲家です。すぐれた教会のオルガン奏者、そして音楽院での先生でもありました。

1886年に作曲されたヴァイオリン・ソナタは、フランクの作品の中で、コンサートで最もよく演奏されます。日本では「ヴァイオリン・ソナタ」と呼ばれていますが、もともとのタイトルでは「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」となっています。つまり、２つの楽器のうちどちらかが主役でどちらかが脇役のようになるのではなく、どちらも同じくらい見事に活躍していきます。全部で４つの楽章がありますが、今日演奏されるのは第４楽章です。ピアノが弾くメロディーを、すぐにヴァイオリンが追いかけます。まるで二人がお話をするように音楽が進んでいきます。

チャイコフスキー／「ヴァイオリン協奏曲」より

独奏ヴァイオリン奏者と、オーケストラが一緒に演奏する「ヴァイオリン協奏曲」という音楽があります。有名なヴァイオリン協奏曲には、ベートーヴェン、ブラームス、メンデルスゾーンというドイツの作曲家たちによるものがあり、それらは「３大ヴァイオリン協奏曲」として知られています。今日演奏されるのは、ロシアのピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）が作ったヴァイオリン協奏曲です。この作品を入れて「４大協奏曲」と言われることもあります。

作られたのは1878年です。チャイコフスキーが38歳のときでした。弟子のヴァイオリニストに相談しながら、2ヶ月ほどで完成させました。しかし、演奏するのがあまりにも難しい曲になってしまったので、有名なヴァイオリニストからも「こんな曲は演奏できない！」と言われてしまいます。ようやく3年後に初めて演奏されましたが、当時のお客さんにとってはとても新しい響きがしていたので、みんな驚いてしまいました。それから150年近くたった今では、多くの人たちに愛される作品となり、たくさんのヴァイオリニストたちが弾いています。この作品も、きょうはオーケストラが演奏する部分をピアノが演奏します。

ヨハン・シュトラウスⅡ世／ 芸術家のカドリーユ

今からおよそ200年前、音楽の都ウィーンでは人々が朝まで踊り続ける舞踏会がとてもさかんでした。ヨハン・シュトラウスⅡ世（1825～1899）は、こうした舞踏会のための音楽をたくさん作った作曲家です。なかでも彼のワルツ（男女が手を取り合ってクルクルと回る踊り）は舞踏会で大人気となり、「ワルツ王」と呼ばれていました。

この曲のタイトルにある「カドリーユ」も、踊りの一種です。４組の男女がつぎつぎと相手を変えながら踊ります。「芸術家のカドリーユ」には、実はシュトラウスⅡ世が自分で作ったメロディーは登場しません。当時とても人気のあった別の作曲家によるメロディーをアレンジしてつなぎ合わせ、まとめたものなのです。５分ほどの間に、なんと13曲ものメロディーが次から次へと登場します。今もよく耳にする名曲が含まれていますが、みなさんは何曲わかるでしょうか。

メンデルスゾーン「結婚行進曲」、モーツァルト「交響曲第40番」より第１楽章、ウェーバー「オベロン」より《ヒュオン、我が夫よ》、ショパン「ピアノソナタ第2番」より第３楽章、パガニーニ「ヴァイオリン協奏曲第２番」より第３楽章《ラ・カンパネラ》、マイヤベーア「オペラ『悪魔のロベール』」より《そうだ、黄金は幻想にすぎない》、エルンスト「ヴェネツィアの謝肉祭」、ウェーバー「オペラ『魔弾の射手』」より《天よ、私の涙を拭き取ってください》、シュルホフ「羊飼の歌」、シューベルト「合唱曲『茂みと枝の中を通り抜け』」、モーツァルト「オペラ『魔笛』」より《私は鳥刺し》」、ベートーヴェン「トルコ行進曲」、「ヴァイオリンソナタ第９番『クロイツェル』」より第２楽章

どの曲も、カドリーユの生き生きとしたテンポにアレンジされています。名曲がどんどん登場し、当時の舞踏会は大いに盛り上がったことでしょう。

ジョン・ラター／「弦楽のための組曲」より第１楽章・第４楽章

ジョン・ラターは、1945年にロンドンで生まれ、作曲家・指揮者として今も活躍しています。彼は少年時代から聖歌隊で音楽を学び、クリスマス・キャロルなどを中心に、親しみやすい音楽を作ってきました。

1973年に作曲された「弦楽のための組曲」は、イギリス人ならだれもがよく知っている民謡をベースに作られています。全部で４つの楽章がありますが、きょうの演奏会では第１楽章と第４楽章が演奏されます。

第１楽章には「さすらい」というタイトルが付いています。とても明るい和音で始まり、軽やかなメロディーが続きます。中間部ではゆったりとした雰囲気となり、「私は愛の種をまいた」という民謡のメロディーが登場します。

「アイロンをかけまくる」というユニークなタイトルの付いた第４楽章は、「月曜日から日曜日（海外、特にヨーロッパでは、１週間の始まりは月曜日というところが多いのです）まで、いつも僕の奥さんはかわいいなぁ」と歌うイギリス民謡をもとにしています。ラターはこのシンプルなメロディーから、弦楽が豊かに響きあう楽しい楽章に仕上げています。

メンデルスゾーン／「ヴァイオリン協奏曲」より第１楽章

クラシック音楽の作曲家たちは、重い病気にかかったり、とても貧しかったりなど、苦労の多い人生を送ったというお話が多いですが、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～1847）はちがいます。お金持ちの家に生まれ、かしこく美しい少年として育ちました。また、音楽的な才能にも恵まれ、まわりの音楽家たちからも尊敬を集めていました。でも、38年という短い生涯しか送れなかったことが、大きな不幸と言えるでしょう。

メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲は、1844年に書かれました。その頃、メンデルスゾーンが指揮者をしていたオーケストラには、ヴェルディナント・ダヴィッドというとても上手なヴァイオリン奏者がいました。彼のために、この曲は書かれました。第１楽章はとても有名で、ロマンティックなメロディーが登場します。伸びやかなヴァイオリンのメロディーと、迫力のあるオーケストラの響きを味わいましょう。